

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

卷 15
508
2



卷之二

○朱子曰春秋之辭命猶是說道理及戰國之談說只是說利害語類四十四

而世道人心正小成
以至其流风迷了人間道理不遠了人
物之小人之義氣者多所犯。戰國之
久以來小人之流氣終歸人犯。故
而小人之流氣多是利害之小利
之害之利と人之義氣と爲之也
○管仲春秋乃以之立之霸道と做。得武侯李漢に

生きて王者のつくり御とも甚盛られ管仲は
似すも亦時後弟子武漢と海へ蜀人材故に
歎てこれ武漢遂旋して许多れ人をねむる
祖先武の時雲の山々今ひ彌留の山々也す
ゆとえり此人何ともい時すとめ何うへせし
殿ハ大堂也商周以葉其名不載按史記秦始皇本記
始作前殿蒼頡論魏有太極殿自晉以降正殿皆
名之後漢

我国自漢隆盛の時大極殿省院の事と是

西歴

邦の制ヨウリ其名とて号トナリテ
○昔し管仲立みと治ノ一時也間と號ふるセドトコトア
サ間トハ治方セ其後今アリの資と徵ラクして軍國の佐クニセ
ウキ立雜祖等鳴呼管子ハ亡アガマハの如きのみトナリレ
ウと集て銜ハシト共利を射アリはくや唐宋又官伎
行ハシト共色と市ハシト共色と争アリヒシム
其色よしくて殿嬪アリは活アリ者と土妓アリ私黨アリと
呼ハシト乞アリの羽アリの時南北二京の教坊官娼妓ヤセと校アリ
ことと脂粉錢と称アリも郡縣シテ隸すアリ如アリの者とモ

樂ニアと名づけし使令に聽セリ。さればやく大都令の
地ニシテ不避女力石を以て冲ツト。窮錦僻邑ヒトモ立く
豪色れ也。さうアリ。而しあくノアシニシ。内ノ書ニシテ
もアリ。我國今日のトキ、京師東都ノシテ有る。都令津
御等小花柳の業トシテ。あ万く其代點茶逐客の言語室
端闌の類私科小姑の徒ニシテ。皆アリ。人也。物也。も
官其利と覓て痴微セリ。たゞ一ハヤリ。是の喩智トク
愚也。かく老も。弱も。彼惑いの止ム。沙井賣僧の
都ニ入て。そも。賄子財と。多ひ名とす。一金と喪す人。

古今又ナリ。猶梨園の少年。渴故ト業と争ひ。帮闌の
剽客トシテ。毛色と。僕アれる者。亦。都鄙ニ流。尔セ。世人
是等に親。す。ん。ハ。か。れ。ナ。殺。多。と。多。て。演。鬪。馬。一。ヌ
其志と。喪。輦。輦。少。あ。了。と。も。之。重。よ。ほ。シ。き。ハ。人。の。事。
入。て。其。道。一。あ。り。と。て。刑。よ。り。也。の。それ。も。ま。キ。ミ
ト。シ。レ。ヤ

。尤傳曰既定。余率殖蓋飯。吉父。殿。

文殿とハ。壯父と。率て。淳。ト。ソ。リ。ト。云。方言に
燕朝の。ら。これと。殿と。傳。南東に。も。れ。と。或。ト。呼。ぬ

詩小所謂一發五破是也。あれも田川子も「
一々他よりは遠あれ考とひてこれよ多く
秦始皇帝御名の碑に寄附とあハ教之ノ事
とこそやアハ御事ウムとれ。」云々。と
以て其處又と乃龜とゆひし云々のせかハ
ソラク者紛定ヤ。

○藤公定卿西二位
翁言所撰の編纂本朝尊卑分脈圖アリ。曰
卷系魚名流アリ。系圖父子之次第八分流之相承說之皆不同
本末不一。仍其其實難記決者也。或從日本或从支那說。注

載之。但猶不辨其可否。將可尋決是亦矣也。ソラク
系譜の書あり。而作人不詳。安シ。此とソラク所とれ。す
中あんれ只將。實記とある。恐ぬつゝ。も
○人ハ。そぞ。梅。うら。も。や。川。う。の。春。ア。セ。く。も。や。
ム。年。を。手。の。お。も。え。ひ。ア。ミ。も。り。と。あれ。う。る。よ
ニ。春。一。時。の。こ。め。さ。く。ス。る。う。し。よ。や。故。モ。や。く。う。る。よ
海。う。だ。行。う。る。人。の。め。も。り。と。梅。う。も。春。兩。の。年。よ。又
そ。先。ち。後。山。吹。え。う。う。ま。る。又。列。れ。い。ま。え。と。そ
う。う。ん。化。レ。仰。れ。も。定。め。う。う。り。す。う。う。

事もへども心をわて人の事よりやうと

在るれどもあはれり思ひ事とぞよめりよみけし故

ノリよれし見るのゆきうすて

豊原のゆづ

ありゆうそふのうとくとも又うき山故のそれ

。阿蘭陀ハ淳泥亂妙セ列の一名

歐羅巴
の名
の居列

我國す西丸にて

海上二万二千九百餘里セ列ハセイラトクルウヌグライタキト

ラルトクレトウルニセハブリイスラニトシラシタ

北極地とちり半五十度に至る所行て風氣りうこ

袖船スリムツと云ふとある高船と行方セキと

たもてさういふとある高船と行方セキと

筒長とす
筒長とはア
ココロヤトはア

袖長に主ありて國とろり

たもてさういふとある高船と行方セキと

本國船と遙きシ放帆嘔ジハの一路咬咽吧アラガラジヤガタラトモ

と云所と

後傳也と仰アゲマシセらうん我俗に云と主高船と領りて行焉アガシ

其船の名と仰アゲマシむ年アゲマシにて官運陞高アゲマシの仕事アガシと較勘

十五年又一月アゲマシ主高船有司勘驗と遂と云船

人万巧アガシて元主付の利化アゲマシのよからずあ丈鑑船殊アガシ

大に堅固アガシす而化アゲマシに移り入船と稱て風浪アガシを蒙アガシ

又主天文化アゲマシ年アゲマシも御主馬アゲマシて竟致アガシつとそも三月船

柳家アガシにセテ改主辰アゲマシニシテ改生サリ海賊アガシの私事アガシと

まへぐくくくくふりで彼の名へ方里と
名て又いふ今わ色白ひ發あて縦のくらう鼻
もく眼中小白り有毛輪と剝剥と切もさたかとも
衣服とれどによき今波の筋ひとひのう紙のうのえ
空ふるはせり渡原の内所足あくも人れとひそモ脚跟
ゆうて地よづれしる履のくよあひて跋と化て跡
脛もく下もく足引ひやあく處も皆敷に近まや人品
アリト被ひて歩まかへるつにハ似もセモ弱
ちる丸象又は波多乃に漁丸にしあ酒とぬむれを寄

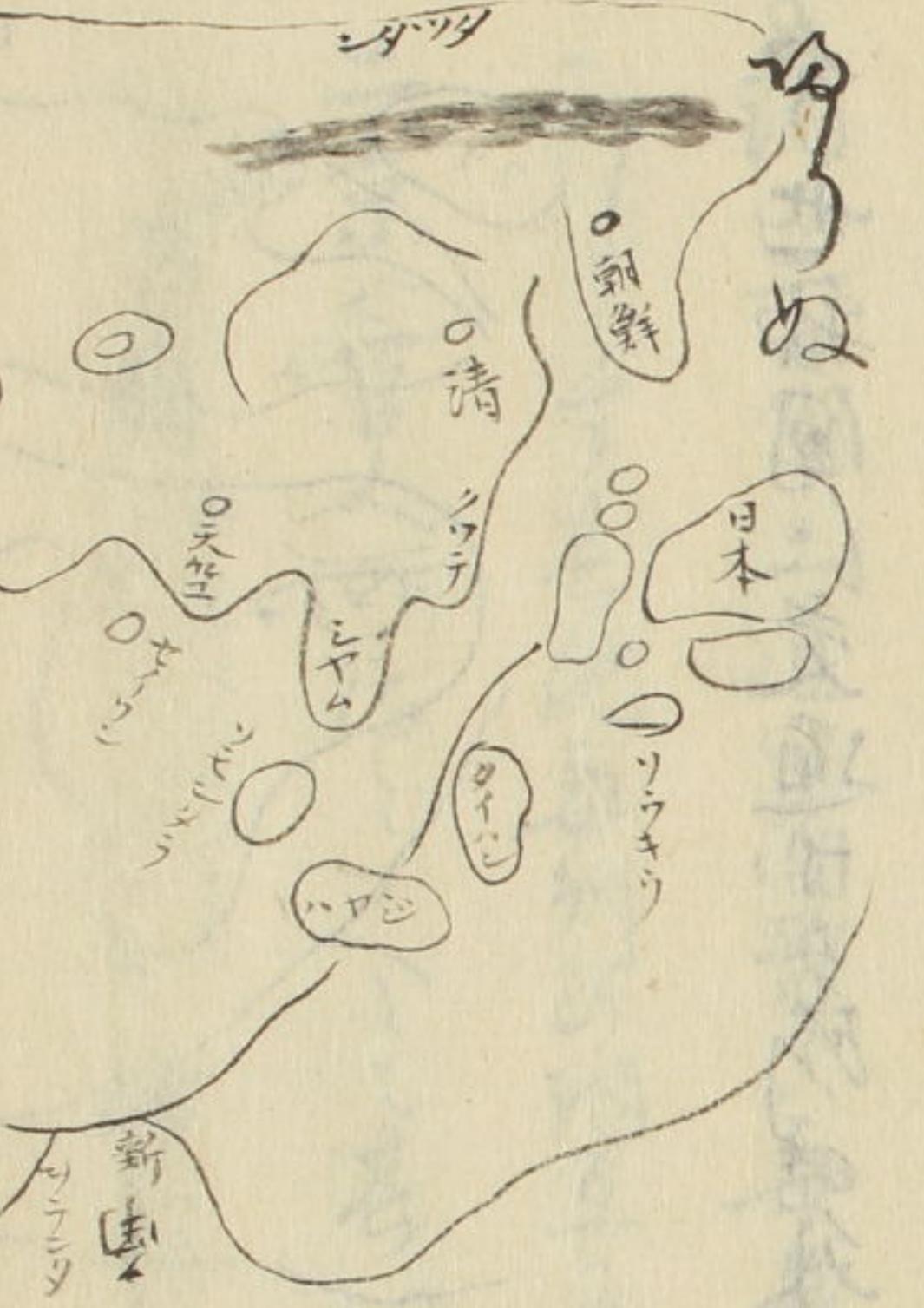
の者かと云ふ今波多の中かじきとくはる猿
さくさくとれども草れぬはすもと又と同車のう
立文ひてうちとぞ敵にあはよ絆帽と服と其の内
とあく御鏡ひしるかうて唐舌のるうもとひと
ひさし御國の言ひてるくあれどあせりくくくく
してゆゑうううあ人のうや毛ぬのあくとあ
ハね毛の聲にて墨を入てつく波多の後風う波多
一木と云ふ小方四半はなまく達原女と呼んでせうとおぼえ
せうとはまくとや

波食はぬよし麿よし刺せし候やのわとのし食ふね

もろきよ海と海と海とてこあらうとすまのゆゑをゆく
彼國我入港せし、彦國より遠署う記とく 先にア 肥前
平戸に島原、寛永十年以降又高麗へ入港されハ城内に
あり、仁夷ともいはれ風にとも偏どきセ月の砂長崎又
入港して文嘉一子を三年身主ニカビタこと南洋航行者と
代て九月アリと限て飯帆セテ九年八月ノシテ、アラモチと
て走ルハ殊ヨリ昂昂ハ氣毛御、萬般可用也。牧羊に遑無モ
ハリケンキ、主君のどうぞおけりとも竟無文武の道ばつす
而立途々アリテ新教トアリテイドモ教化人あらず教ノハ

行と通よハシキヒトニ人ナリシを彼國嗣以東島長崎
でナサフ後、有司ありて民と合一札リヒテ之病セキテ
今日ナリ文通北業ナリテ生と遂シハ又後送ノ
荀天氏ノ民、無脤氏の民、アカナリテナリ
人の人欲モアリトモ然ニ翁モアレムモアヨリ

ゆく

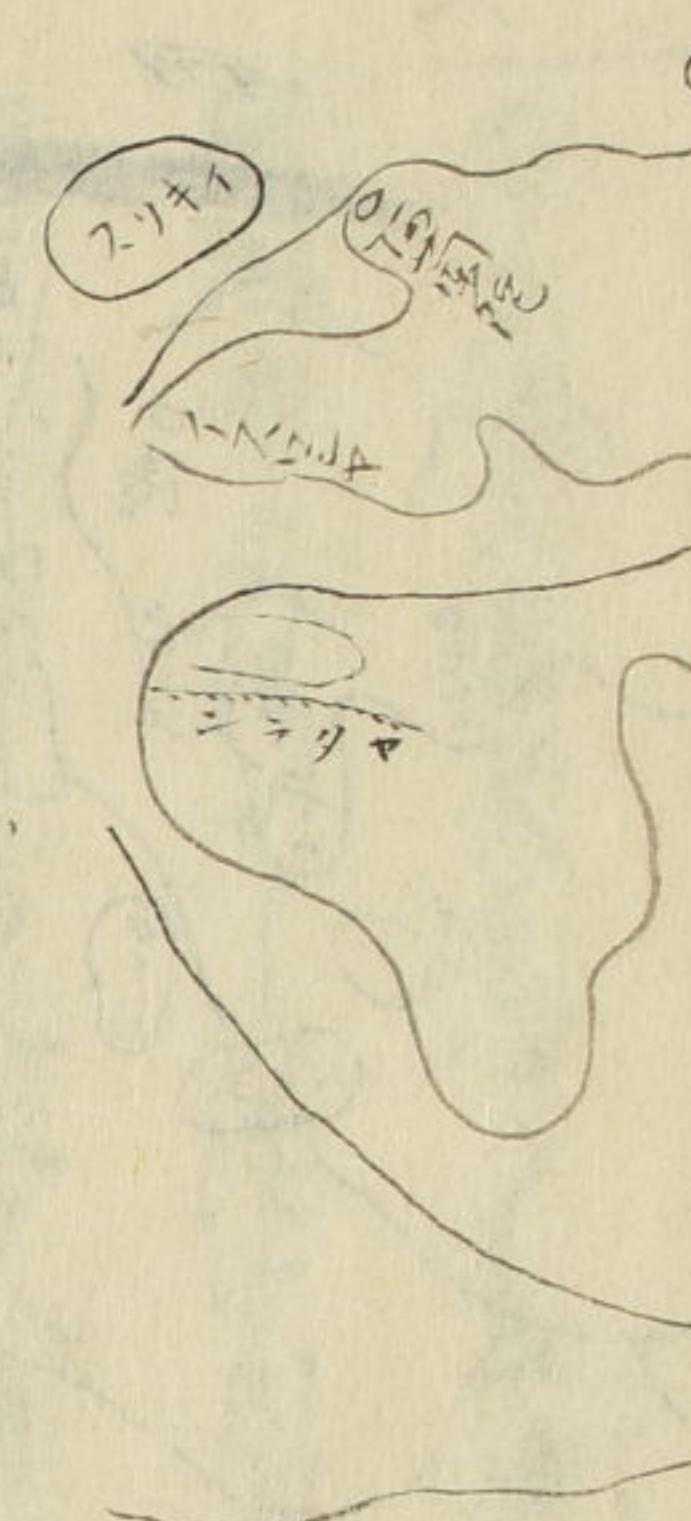


○メストル 騰也

下司也

アフロア

。今世我国に交通する所の外國琉球ノ脣と交臣稱し朝鮮
毎に隣好と仰り通使ハ所々と入て鬻賣貿易大寃文趾東
京及ひ天笠の内にして古城東埔寨スニ泥六甲蓬羅琵琶
牛滿刺加等の諸國より來て船商セリ從莫卧キの如きハ
南天笠オの大國婆羅廣ノ開闢最初の地にして佛跡
残リシトワヤ今我より交通する所皆國字横行に書す



但一北の方外夷の中に回の如き久しく中國に通セ
改漢字と同音され萬國の詞音訓にて文字に心う只
音との國ゆ天笠二字多義と會とし唐の如く韻津哉
謂同にハ那モ亞鳴港ノ宋諸庇利亞等の國前蘇契利
斯當ナリノ耳ナリテ其人と入したまつる
。清の二京十三道の商賈ハ毎年秋に入清す其國南京の詞と以
て之す其他每列の向とよ異うて相通せりサクアリ
二京官人の居とつも其沿岸へ取たどハ

白糖 南京ベラタンと云
サルミエトシト云
サルミエトシト云

南京と外列ハ

文趾

南京カラリ
潭列カラリ

廣南

南京クヒナム
潭列カラリ

此類多々

。海潮凡て満運速土地に於て舟一隻アリ申異邦の事
向々見立雜組等。我が國にても西ノ同舟モソシ。海行死國
今人及ヨリ。西偏後北白石ノ海リヨリ凡五十里其の湖ノ潮之上へ
ア滿之又ノ周防のまし小至て旱年里の海上潮上へ
あくまで西門之江自北流不の山上のすすき四十里湖リ
伍ノ半才ノ以西北度アリ。又半千里又上へ満其處は
ホトウ等吹拂モアリ。又長門のりは鼻もく潮れ方へ

船軍と既者湖以のあくとをや

きこゆきる波々くわちくらす。

。或人問様樂は被、足利三方がの時此と云ふ曰今の
。とく其聲を紀別定アリ。乍ら様樂ハ古アリアリ
源氏内院様樂とハ一傳院入御時もとてあそい。是る
尼系立文源慶賴れニ勇力樂遊と云ふ人アリ。ニモと
様樂長者ハ浦ト。即ひ車又右近は足の樂也。が男
久能久連久ナモちよ様樂めもあり。一由公足分脉圖
アリ。後賴ハ宇多源氏也。敷實親王の男也大臣
源重信の玄孫伊勢守俊重ノ子ナリ。又同之又トモ

心致と以ては事とせりとすく是近世の俗風と曰ふ
僧も中世よりあり古事記よ慈観大师及ハ以て引説の
法苑經を以て一寺あれ其例又有りとす

又同法道和尚和極樂ノ音韻と於晨旦慈光大師傳
清涼引声ノ於日域とは誰ノ語也曰是ハ鎌倉佐々元

明寺開祖記年禪師の語也

○此春^{壬辰}三月南紀那智山如意輪乃靈像を伊勢國松坂取
に一あ收と定め諸人よ詔勅シテイキ作リ一もてハ
大神宮至高の志向あるをすれど隠れ事無

之も思ひ立てずかじゆくせえりきてててゆく
をきのとナレ御駕すほ人のとくみやまくひむ折玉了
けくらふるゆきも此ゆくをくみゆきとやく仰むとゆく
以ふれはとすくはく御れ余のひまむくまく御焉

○二月尽

殘花辭_{アラガタ}落幽庭 新葉帶_{アラガタ}風顛晚_{アラガタ}

可惜春先別_{アラガタ}去

孤流無_{アラガタ}半池_{アラガタ}サ萍

○丹山の供僧毎年六月_{アラガタ}香風の熟_{アラガタ}花_{アラガタ}乞_{アラガタ}大金_{アラガタ}或_{アラガタ}作地

盤_{アラガタ}と盤_{アラガタ}又剪新花_{アラガタ}と送_{アラガタ}多_{アラガタ}大_{アラガタ}少_{アラガタ}盤_{アラガタ}十_{アラガタ}飾

乞人形をもとめし者とこれと申るよ新日は食をうすゆ

ひくと勤て後衆徒れ角よ入申り其費と傳す

我勢田四月八日花びそ甚年のひノ盤上の觀のひい神

人の食と云て座位と爲るもこれより仰す便一ハ清

乃花のひ、花中の供花に起り我勢田の花のひ、灌佛

寺也甚速ハ向一かすありや

弓清次ハ御神樂ハ仲春仲冬ハ上節

勤ニテ官人と差

俊人系向一て求子大比禮ハ歌伎舞等の部もと教ま

少事とモ

神樂の事にあらず

二月ナ宵ハ

御國忌

此後毎四二日守の御祭事と多ニテ自安居ハ八幡下乃

地人主にすも久是又つゝ八月あのの故生氣事迎也

門再無りて古ヘヨカリモ金科一千石石津の

廟ヒ御神うち之廻らハ源氏ハ御社されば益々

神え云トヨ旗ヨウて海シマにけず、民草までまと運ひま

ひくよひる神ハ靈徳あれハ言葉りうけてヤモチ多シ

。野俗れ歌フ)

あすかす山伏り山伏とテテテ猿子もいたれども

さくまふくゑアサカにまほ通ニルが事代主にて麻富と

アサカ

極て難^{ナシ}す。民の役^{イロコト}也。

麻^{アサ}役^{アサマシ}去年^{モテ}今^{コトシ}歲^{シトリ}麻取^{アサマシ}ノ豫^{アシテ}子等^シ麻贋^{アサクシ}也。

とよもとく又

鐵宿^{アハシヤ}ハシの上^{アハ}此^{カハ}下^{アシテ}はあすやきの里
少^{コトトニ}足^{アハ}と^{シテ}如^シいと^シ飯^{アハラ}屋^{アハシヤ}碑^{アハシタス}アリ^{シテ}これ^{アハ}者^{アハシ}

伊津貴川^{イツキガワ}ハ土室^{アハシタス}と制^{アハシタス}す所^{アハシタス}アリ^{シテ}ナシ

美濃國席田郡に伊津貴川あり金葉
ノ下勅撰乃集に哥多々^{アハシタス}アリ^{シテ}

御庭列^{アハシタス}にて土室^{アハシタス}と後^{アハシタス}小築^{アハシタス}用^{アハシタス}宣津^{アハシタス}等^シや其制^{アハシタス}を有^{アハシタス}。

御庭^{アハシタス}一^{アハシタス}方^{アハシタス}八^{アハシタス}風^{アハシタス}去^{アハシタス}後^{アハシタス}等^シアリ^{シテ}ナシ

○山城國少原^{アハシタス}之^{アハシタス}新^{アハシタス}と^{シテ}素^{アハシタス}女^{アハシタス}腰^{アハシタス}帶^{アハシタス}ハ世俗^{アハシタス}也^{アハシタス}。

前^{アハシタス}方^{アハシタス}にて^{アハシタス}是^{アハシタス}後^{アハシタス}有^{アハシタス}建^{アハシタス}れ門院^{アハシタス}入^{アハシタス}出^{アハシタス}而^{アハシタス}仰^{アハシタス}仰^{アハシタス}也^{アハシタス}。

地^{アハシタス}主^{アハシタス}新^{アハシタス}と^{シテ}載^{アハシタス}下^{アハシタス}山^{アハシタス}と^{シテ}人^{アハシタス}家^{アハシタス}有^{アハシタス}て^{アハシタス}も^{アハシタス}。

久^{アハシタス}して^{アハシタス}入^{アハシタス}せ^{アハシタス}ぞ^{アハシタス}也^{アハシタス}。風^{アハシタス}吹^{アハシタス}て^{アハシタス}ま^{アハシタス}と^{シテ}う^{アハシタス}食^{アハシタス}。

そ^{アハシタス}も^{アハシタス}仰^{アハシタス}て^{アハシタス}八^{アハシタス}風^{アハシタス}人^{アハシタス}。

○御^{アハシタス}事^{アハシタス}と^{シテ}高^{アハシタス}官^{アハシタス}候^{アハシタス}た^{アハシタス}は^{アハシタス}、
育^{アハシタス}い地^{アハシタス}小^{アハシタス}獄^{アハシタス}舍^{アハシタス}あ^{アハシタス}。眾^{アハシタス}人^{アハシタス}刑^{アハシタス}也^{アハシタス}。も^{アハシタス}追^{アハシタス}亡^{アハシタス}。

化^{アハシタス}と^{シテ}ゆ^{アハシタス}へ當^{アハシタス}時^{アハシタス}れと^{シテ}敵^{アハシタス}出^{アハシタス}し^{シテ}喝^{アハシタス}七^{アハシタス}靈^{アハシタス}。

セイ ひりや あはれ

或ハ曰、ヤンデンテシハ鉢大鼓の声ナリトモノヒタムアハニタ
くと稱すリモ初ナラ母と子ひール事と云ひれ候後モ是
○或人曰、勢江以西の農夫水田と耕ヒハ犁を以す御尾列の民ハ
皆鍬と刃のアレハ牛耕ハ一人半日比翌曉田一段とノモ申
所と云すアク者シテ苟ホリトヨリ牛と飼費アリモ民
力と省利アルモノトヨリ風信ヒトイタツシテ所不考スリト
曰、予これと同クノ辰がたヒク犁功代する事ナリト云
夫袋アラ壊柱ヒテ泥土湿アリ、但子國地ハ犁革トヨリあ
スナリ

耕一トミドク 深耕六町
稻に害あり 势江等の田多ハ甚土氣高被
也、我ア尾南嶺に在い多多少石之犁と取トマサム
モ日本郡小牧以北至也多キ地山と云又犁耕セシ凡モ犁
耕ハ僅に土壤寸鍤と宣範也、湫の切宣にて通一トミトモ
旱牛の坂ヒ耕す尾流等のやキ、行政の田ハも深く耕ヒ
久洞ヒトモトモ深掘取引強制せキニテ甚根ぬキナガヤ
破壊傳力地ハサ一畠ヒシテ耕秧アリ、犁耕セシ甚土
地の競争ア降て耕種異リタク後民不同テ仕官メ人ハ民家メ
草木テ

定勸農業れありとすとすも考多一時所へて島貢と
通て而人民事に少とあつたまひの事と認矣すア
此を承代ありとすとて改名民より更に革る事とシハ
シタリ

。遠山國秋主山、物ヲを被の御化にて前下野守景隆
親王の軍 宗良 大令旨と奉一近えのむちにてこと
乾奥ソクヤの兵と後て王の軍と勤一其勇威爲守景豊
子民給の脚遠轉及び其嫡對馬守遠自にそしては城と

主羅せ

遠轉以東八宗良大守

時

ラウ

主羅せ

尹良親王の幕下

時

ラウ

後高健の称号と傳ふ御月王辰大日天皇御之の

御駕者 快車院にあひ仍え其地の旧廬^{ヨウル}詔使^{ヨウシ}すと仰すむ

又アモ思義世にめづらしくもありとあると云ふと集見
みす、若小幼也事にても承く從ててし書わし仰

家兼青鐘刑部大輔幸和ヒトツヤウノ席ハシ一肩達ハサハにあつて、其の今ハ仰

モアリセテ御夢後のみを假山に納てり民族の
名と連れてゆく家の及第之候すとて仰説に接け仰

後とあつておふかちをうやまひて一とあづれり
かくす書面をもとへんがつうそとぞ

うれしまれ所ゆ記へ伊そて懐のれは

古往世の苦厄を記すあたる事無く名爲たる

。家父信幸公維列モロコシの元より九年正月四月中丙

にハラミとあ鬱憂モロコシ也アリテ多シ詠までそ自、祠堂

少斎アツマツもとすすと多き事無く夏至秋も

うそあれあらんとすかく御モロコシ神めぐらす

隠れ歌モロコシあらまくばし、俗モロコシはト御モロコシ例のあらむ

。以モロコシとぞう歌モロコシとぞういとぞう神モロコシせ

。人立モロコシ死モロコシ死モロコシ山登モロコシ鐵モロコシ游モロコシ人モロコシに猿モロコシ雲モロコシと
見モロコシ傳モロコシと身モロコシ傳モロコシれ大モロコシ猿モロコシのゆよモロコシて止モロコシすとゆよモロコシ死モロコシ一

死モロコシに比モロコシ筆傳モロコシ不殺モロコシ夷モロコシ而モロコシ不傷モロコシ死モロコシ一木モロコシの

伯モロコシの言モロコシと不避モロコシ楚モロコシ負モロコシ毒モロコシ水モロコシに流モロコシ死モロコシ一木モロコシ乃

孟姬琅耶モロコシ死モロコシ一類モロコシ止モロコシつと一箇モロコシ志義負

正モロコシの志モロコシ改モロコシすとて自身モロコシと喪モロコシて遁モロコシて燐モロコシもモ地代モロコシ

也モロコシ后モロコシ貞モロコシ義モロコシとすモロコシ節モロコシに死モロコシて燐モロコシ也モロコシ

又モロコシこれとモロコシ後モロコシ利害名モロコシ聞モロコシ考モロコシ身モロコシとモロコシ小故モロコシ

惑ひより今と一いすより五年と曰へて語れ画ノシ也

樂色アメイロカラス父母マツリ奢マツリ母マツリ奢マツリ父マツリ窮樂ヒョウガク窮樂ヒョウガク者マツリ乱之ハラフ所マツリ真也マツリ周宣善スルニ九詔

嗚呼色奢樂の心無元にして止し色と始と才乾坤の

西德閑雅乃有別大嫂の礼文而半之聖人倫の道と

重タメ其始ハタハタに至マタマタ苟マタマタ也閑マタマタ慎マタマタ也

惑情ハタハタ仕ハタハタせは既マタマタ而禽獸マタマタ也隨マタマタ也莫マタマタ也乞マタマタ也

○謝肇淵曰ハタハタ今巡ハタハタ還ハタハタ一銀ハタハタ至ハタハタ使ハタハタ執而因之ハタハタ貪官ハタハタ道ハタハタ首ハタハタ千萬ハタハタ相載ハタハタ以ハタハタ破ハタハタ而ハタハタ人不問ハタハタ也故懼ハタハタ法ハタハタ者ハタハタ皆愚民ハタハタ而犯法ハタハタ者ハタハタ皆君子ハタハタ也ハタハタ嗚呼一銀ハタハタと鹽ハタハタも鹽ハタハタ也故吏ハタハタこれと執問ハタハタ也

一政と鹽ハタハタ下ハタハタと教ハタハタて利ハタハタと鹽ハタハタ人ハタハタすハタハタ多ハタハタりとも免ハタハタ也且ハタハタ用ハタハタらハタハタ何ハタハタ而ハタハタ貪官ハタハタ朝ハタハタ又滿ハタハタりは盜ハタハタ林ハタハタ三ハタハタ千ハタハタ一ハタハタ千ハタハタ朝ハタハタ廷ハタハタとハタハタ子ハタハタ唐ハタハタ北文宗ハタハタ曰ハタハタ河北ハタハタの賊ハタハタとハタハタ無ハタハタ乎ハタハタ易ハタハタく朝ハタハタ中ハタハタの盜ハタハタとハタハタ知ハタハタれハタハタ、經ハタハタ一ハタハタとハタハタ又ハタハタ小ハタハタ人の厚ハタハタ絃ハタハタ行ハタハタまハタハタてハタハタ義ハタハタとハタハタ又ハタハタ小ハタハタの私ハタハタ心ハタハタとハタハタ教ハタハタてハタハタ利ハタハタしてハタハタ又ハタハタ是ハタハタ近ハタハタ代ハタハタ已ハタハタに背ハタハタす己ハタハタ而ハタハタ私ハタハタ心ハタハタとハタハタ教ハタハタてハタハタ勝ハタハタとハタハタ厚ハタハタてハタハタ受ハタハタとハタハタ將ハタハタ一ハタハタトハタハタあハタハタつハタハタ而ハタハタ曉ハタハタとハタハタ勝ハタハタとハタハタ教ハタハタてハタハタ外ハタハタ臣ハタハタとハタハタ思ハタハタりハタハタ一ハタハタめ利網ハタハタと張ハタハタてハタハタ下ハタハタ民ハタハタとハタハタ海ハタハタれハタハタ大ハタハタ盜ハタハタの橋ハタハタ

我が國の歴史とくらむと云ふ事に即し
○又曰、嘗て有入粟得官之率。蓋其產上人皆日堅之金也。古人亦
有之。昔司馬卿以貧乏爲郎。至武騎常侍。其後病卒。免粟
家徒四壁。立水買官而貧乏之故事。辛亥爲絕倒。今也乃
愚俗賄小貲。と聲一飞。貧困より所居。向ひは所縁漢人
故なり。身をすまひ。

○又云。以才名驕人。未有不困者也。然富貴驕人。必有不敗
者也。以貧賤驕人。必有不取禍者也。今丈才識名也。世乃
重も。而所謂富貴者。人の物とす。能く自分とも。是に

驕傲して人と肩下せむ。これと誓言も是と憎絶ふ。余
因善敗棄せざるに。主事古今。多も物貪。乞ハ世の厭也。
可賊ハ人乃む。否や。何の驕り事也。と云ふべからず。有
よ。不平して。多病。せりつす。而早賊。よ居者。やも
よ。世と憎む。人を恨み。云ふ言ふ。て。濁富清貧。よ
不如不義の出。身。浮雲也。と。夷裔頗爾。の賢。富
且貴。す。口。小。平。居。亦。文。言。して。矯枉。よ。過。凡。そ
そ。人。を。精。鑿。人。と。えて。必ず。白服。と。以。て。富。存
あ。よ。多。者。と。聞。て。か。と。衰。困。而。窮。迫。の。り。と。ひ。の。心。よ。じ。

かよ人を侮る程トモモニル自貪賊も猶モ人と謾ま
ふれど々世堂ソト憎厭ノリ血リ人々人恨ムハ何を傷と
害ヒテアリテ乞食賤に安ヒ今不仕事シ少人す

○夢れ世の外とありの如くされ候フニ危クヒトニ至ル
ナ更け立事よりかのうえられ行の事ニヨモモモモモモモ

○或人宿足スレバおノウドリヒテナキシテ御宿
伊リテアリムササギタマヨヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤ

折句加幾津把多

唐衣著乍駒惡嗟

八橋開渡三河水 千歳情残一朶ノ花

○地藏拔六趣四生ノ若患ツ不動除三障四魔墨凝折伏機度至
極是大利遍照悲智方便也ミ密家ノ口傳

○醍醐ノ聖宝理源
大師 儒正にナリハヒ一時冬内あくらリテ

身セラモナリシルハ蓑笠きて太肉に身アリ且トイ南殿ノ
シテ禪ヒリケラモシテ供ヒ般若寺の取引只一人ナリモナリモ
立モナリトモナリ日記又ノ一也毎往老師沙室集
書アレシカ當時ハ僧法師驕ユル不避入休モナリモナリ
シテナリモナリモナリモナリモナリモナリモナリモナリモナリ

參内セリ。僧無くの事。近世ハ車い寺多々トツモト
論語より古事記傳にて、とくあくタニムシセキ。僧
俗のヨリノウリ。紹興増聖聖院に有利と歎。甚
師とも諫。反人比世子は聞。也行。也

○信列松代古今

河中鳴

ヘイ一僧云其事。法也。とて古跡。至四

ウナ。トモ。無能造。も。ア。西道の像。ハ。千年正觀。

盧空院。千。ハ。三。ス。斗。ニ。福。也。

泉造。座光同持の古佛也。坂上向日磨。又大同元年乃建立

も。而訪。い。と。大。年。ヒ。丈。ち。乃。大。日。ハ。ス。の。四。天。と。安。也。向

と。く。不。毛。古。像。鄙。か。無。す。勝。地。ヒ。是。武。田。家。又。緒。の。後。毛

家。の。傳。テ。ア。天。正。の。頃。土。德。少。忠。輝。主。附。領。ト。テ。ト。此。時
修理。セ。ア。セ。ア。リ。ク。其。後。參。議。忠。昌。卿。の。有。ト。ク。酒。井。忠。勝。の
末。地。ハ。ト。リ。ア。ト。セ。ト。れ。流。フ。即。ゆ。リ。仰。人。ト。ア。而。出。の。如
て。ト。ト。傳。ト。

○。を。ア。國。五。竟。川。方。西。や。そ。川。下。れ。五。院。寺。ミ。第。師。ト。海。也。參
院。あり。ひ。年。に。乾。の。前。ミ。ア。モ。ダ。ラ。レ。ロ。ア。先。年。江。東。
乾。の。改。事。以。く。そ。つ。り。天。竟。川。の。稱。と。い。乾。れ。う。起。リ。方。名
ニ。ミ。魚。師。達。に。キ。小。鬼。の。前。ミ。ア。ル。一。ア。リ。の。羈。體。ア。リ
モ。ハ。ゆ。縁。セ。タ。リ。の。す。れ。ア。佐。麻。の。脣。ヨ。リ。ぬ。や。そ。人。よ

とおせらうとくの傍彌^ノ一今ハシケくにすりやまとて
ほなれがよ奇恵^ノの物を一世人をもと好くねば
。砂石集^{アリ}行基^ル事^トと云ひて仰御送^スみ新^ム者を達
ひすを紙^シと和瀆^{ヒツ}に^{アリ}通^ス一仍^シ名^シ神^ミの御^ミ
萬師^{ハシ}行^ス前^ノの御役^モ 心^{ハシ}とほ^シ仰^スト^クり^ク
まことくらよ^ス一^テ 樓^{エキ}のゆ^キすきと金^{カネ}と^ク

ナ或人^{ハシ}すの^{アリ}是^{ハシ}は奇恵^ノ不思議^{ハシ}すれども和瀆^{ハシ}の詞
ウタ^{ハシ}かと信^ヒと^クむづ比^{ハシ}ヤ^ク雪^{ハシ}佛^{ハシ}の又^{ハシ}アラジ^{ハシ}
ハシ^トと^クる^シ此^{ハシ}和瀆^{ハシ}と^ク名^シの中^{ハシ}は納^{ハシ}む^シと^クと^ク

△宇思^{ハシ}ぬ今^{ハシ}游^{ハシ}行^ス社^{ハシ}也^{ハシ}と^クあ^{ハシ}不^{ハシ}榮^{ハシ}近^{ハシ}世^{ハシ}の不^{ハシ}字^{ハシ}者^{ハシ}心^{ハシ}
キ^{ハシ}ト^クは^{ハシ}ら^{ハシ}か^{ハシ}と^ク承^{ハシ}う^{ハシ}多く^{ハシ}物^{ハシ}文^{ハシ}字^{ハシ}又^{ハシ}目^{ハシ}
と^クハシ^ト御^{ハシ}尾^{ハシ}列^{ハシ}ト^ク室^{ハシ}の御^{ハシ}起^{ハシ}と^ク致^{ハシ}御^{ハシ}役^{ハシ}ト^クソ^{ハシ}
え^{ハシ}ハ^{ハシ}御^{ハシ}化^{ハシ}御^{ハシ}草^{ハシ}す^{ハシ}と^ク仰^{ハシ}御^{ハシ}宣^{ハシ}ま^{ハシ}し
ア^{ハシ}御^{ハシ}御^{ハシ}也^{ハシ}と^ク御^{ハシ}生^{ハシ}一^{ハシ}物^{ハシ}の^ク致^{ハシ}御^{ハシ}萬^{ハシ}物^{ハシ}の
今^{ハシ}御^{ハシ}て^ク予^{ハシ}これと^ク御^{ハシ}せ^{ハシ}い^{ハシ}と^クも^{ハシ}望^{ハシ}す^{ハシ}文^{ハシ}字^{ハシ}
て^ク御^{ハシ}字^{ハシ}高^{ハシ}延^{ハシ}タ^ク 敬^{ハシ}御^{ハシ}作^{ハシ}高^{ハシ}字^{ハシ}と^クと^ク
汝^{ハシ}と^ク汝^{ハシ}せ^{ハシ}也^{ハシ}これと^ク汝^{ハシ}物^{ハシ}と^ク世^{ハシ}流^{ハシ}布^{ハシ}也^{ハシ}
一^{ハシ}宮^{ハシ}九^{ハシ}鳥^{ハシ}山^{ハシ}日^{ハシ}月^{ハシ}と^クあ^{ハシ}く^{ハシ}わ^{ハシ}り^{ハシ}一^{ハシ}身^{ハシ}

比々と種をそなひ一門のりうけます。すこし他。

又いわゆる御子町といひやと深田晋南老人がと感
ます。安佐の行基和尚といふが納まつておは
む風くわきます。

○張文嘉、奇象宝要三卷唐照甲辰の序朱子小学の本流にも備可
考教んと有るの考古の士每々詠句を書く。予家
礼儀節と講じる時も乞とて人との浣髪と辨り
浦鳴子火度に至る。故事万葉集の歌ふくえ書前記
本朝神仙傳より載り。丹後風土記に之ふるもの。

丹後國興謝郡口量里高川村の人日昇部首等。先祖高川興
子トツモ

其歌子奏頭能脣能宇良志麻能古ミ水江浦鳴子す
子等に高朝元と云ひ。我坐り。常世の瀧れ渡の音アホと
清ト。凡モ浦鳴子よ郷と云ひ。來る年三百餘歳之既
ノ神也。以今浦鳴子在紀而モ歟。過百年。りく申風土
記アリ多ト。予極す。子波ノタウ。山見尊氏故す。仙人等
御主の右側にて傳歌より。子波ノタウ。山見尊氏故す。仙人等
一事主神雄畠帝。又ス。にまほの。と。希百代後ノ伝記

土紀アリ慶陽と云てニシテ古事記の既に傳す
に高野天皇宝字八年ニモ聖帝尊御坐御宇多ノ氏神宇
不養一ノ高塚山の東トモアの國ニ神と立神御坐ス
其ノ祠ニ派國主御部ニ坐高賢茂大社也从ム風流也
大和國葛上郡葛木座^{ミタス}一言主神社と或^マ我ヤア^ラ後の
小角以神と傳セ^ル後毛盧也傳教是屬と云ス

イクサハ後も仰^ハレ^ル也
○神代卷に不平の二字とかサニタヲ訓セ^ル不豫の意と
の^ミ後^一高麗の^ミ四半紀にハ不豫水弗周^ハニ^ミ字

トシヤ^マニシタマニヤクサニタヲ点セ^ル履中記憂病
不安^ハナガリ

○或人問我何日一被^ハト所^ニ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ
至廟^ハ別^ヒト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ
神^トシ^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ
歸^ハシテ^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ
立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ立^ハヌ^ミト^ミ

大和國平群郡平郡坐モ紀氏神社

是木菟宿^ハ本廟にて記の宗家共祀^ハ奉^ス

伊勢國負辨郡平群ノ神社

是日神とても多事ハ三代宣麻に有記。晴潤ノ前文確數。ヨ云ク木菟宿称之後晴潤臣の姓と稱い伊勢國ノ被貫^{ニカカ}と云。故其木菟^{ミタケ}の地に上祖氏神と多所附れ。後世神氏の自て出一萬の祖神にも行モ且ア勒余す。トテ移乃所アす。化玉代神^ラと遷一^ヲ祠と云。伊ハ實那礼神^{ミタケ}主と云。傳曰。尊節^{ミタケ}の注。尊裁柳也。と云。又云。

○温石或人同本草に古^ニ磚^{ヒキ}と燒^セて身^ヒと温^ヒ。又證^セ。本草にて温石と燒暖用^シと温石^ヒと云^ス。別に温石と云^ス。石有^ス水引^シ。可^リ不^シ。世^ニ温石^ヒと青色^シ。石と殊^ニ温石^ヒと云^ス。荷^シと云^ス。正^ニ通志^ノ坂縣^ノ所^ニ有^ス石^ヒ。白^シと青^シ。温石^ヒと云^ス。此^ノ温石^ヒと同^ニ。されば、今日风烈^ノ時^ハ、^ニ此^ノ多折^シ。安^シ。多^シ。と云^ス。未^アイ^テ。指^シたげて強^シ。と云^ス。御^シ。未^ア。日^ハ。未^ア。月^ハ。未^ア。日^ハ。未^ア。月^ハ。是^ノ温暖^シ。性^ア。云^フ。の^ニ。う^ニ。他^ノ石^ヒ。即^シ。ナ^シ。云^フ。證^セ。

近ノ波石と名を以て之れ也

○根州大坂四橋近キ前より源院が池と云フ是守屋大臣佛像と云テ弘法塔江乃源也。近年大坂の名佛者ニシキと造已和光寺と云フ。善光寺す佛像と近安直也。ほりくアリハ波石像と統捨。一西ハ故地よ水すタリ和州花多川里ハ元恭帝の旧敷にしてモ湯村の東花多川の西ノ源波塔には源今ハ水池と云フ。モヨリ源波塔モ草事と云フ。此源波塔の由來と云。モヨリ源波塔後テ石室と附記。一仰き立ツ。一且飛鳥川之歌に流。

御用道の御内川と市内和州れん多川有仰とと也河内花多川は本也名所と有事とはせぬ。かく、こそ取締てそ本極と忘みて其め一故に幸社有し。いづくも有と云てすとあり立仰ハレミシナリ。事。

○自然の感應と古跡也

ノトヒトニ月と思ひ。移忌と云も亦汝彦波の也。月影水の印にてあよびす。そのすばに。而も鳴峰。毎雲。そ竹波平。す。はの月圓。に浮て胸臺。明。うす。と。手刀

は雲々とは、ひそてすらおまのひとめどり移る度没れ比
。平家物の化者役を有公定の分脉圖に左門權後不盛
隆也。民部少輔時長平家物化者役也。記せらるりハ
標者三人アリテ、トトアモハシテ黒後別本多キナリ
。中臣祓の詞アコトトニシイワシテ十等々と法家の解多
梅テラス日本紀ニ三韓のゆと云テ天地割判之代草木言語
之時と計テ書を我日本紀半ノアリにて後ノ後も愈
先當乃解セザキ、にヤルモ縛ニ元氣時草亂ニ倫序冥昧乃
ハシト知國性昔の法ニ玄根木立ニ言問ヒ一前と云ハシ

アヌリテ草室トシテ税水を御シテ

。日本紀の文ハ十九卷蘊我ニシテ

。黑邦れ書に御帝室之事を記セし、中世以事制を見て
禮アリテ、トトアモハシテ、古内裡の殿堂室、アリテ、
而爲也又昔尼葛也、即ちアリテ、是日日本紀、小聖田、
宮廟と造起、一毛覆にせし事と擬シ、アリテ、ムスニキ
。今ハ尤大臣家九條代御所と御公御造進ヌ、ムセ
テ中少内室、ムセシトシテ、アムム何事ノ制也ト云、アムテ
ニテ、ト通室ニ間作内室、ハ主事ナム、居裏也、ムセシ

中にて此事教説准歎すもうち作也とかや
凡ての企てと内室作りの法とて
初發國の神宮もしこれより 鏡堂と日本紀西にムツと
訓セ一室の事とのしらと説に限らず

。ハラカラ

旧事宣化記同母子と書すハラカラノト刻セ。胸腹の
茅ト之本也。般ナシルトヒカレカラ。死也ハ矣母足ノトハラカラト、
ヨリナリモモセ

。古佛像はとくの作ぞ。希有比附とす。梅氏ノ日本記ニ
ニ韓作事。鳥造佛之エト。推古天皇の御宇ノ人ぢれべしとされ

。ひゆ化佛アタリ

塙東建中寺ノ三身の印の阿彌陀の印
弘法大師大納言家沖寄附ナ

。云々宣化絶世の古像と云ひ

。世人云凡てそ者此靈に水をぬけハ仁法は效矣と予極生じ
そ。御國上人ハ勿論故日仁化に勦臣が死せば影娘哀傷
の傳歌と仰ぐ。五角形の腹盧玉枕に水盛かと云ひ其死サハ
因水食と。酒の向ありこれ御國仁法もうり以テ
仁氏と。とも餓鬼の外れ善薩多に水をぬき争ひ。まことに
俗ハ御祖先の事と仰ぐ。す。餓鬼として多矣也
思えずのち。小林毛矢御子さんて餓鬼ハ仁庄よ

近頃は毎日も森林に移處と稱ひ當時に水食と厚ん
事なり今紅殻れ裏旗の朝食の方法施食が多と
事にて現り一様毎陀等の鬼類としてあつた事也
柳樹林より
法津の比改や餓鬼と云ひます諸々人の凶先徳の
氣をして御アリ鬼體アトセ一神鬼ともされ
もう少く罪ぬる者と同一く施食を行ふ
此とハ追善化法事小施食とトモハ寒林の餓鬼
迷魂と申すも極苦無樂の人急難心よ往一其福力
を以て今日更靈化塔進紅果を折る事一キモモ

勇と志に見れアリテ行はりにあくまでも施食の行ふ
。客家はよゆすはち御中の施食もしかば
。昔もこう一人の人天竺へ渡モハづく艱難にしてこそ容易が
けり義津三毛の旅と重ふ也サ一時ア去人成百般ニラヒタマ
後者安知前者難不思り今時印度に住人毎に多
旅蹕れを度モ宿すとや三十年又う前まへ長徳了
有り高人アシタナと云はこういゆえもすう云ひて
彼のゆきしゆ足しを靈化塔ヨウカジタよりもすう云ひて
山上石地と云ふ一其の石苔コケをぬらす所の名也

いもほす、仰さむにとどいとせや

。或へ云々古き鐵の刃に千里切と云ひ是は昔古江千里
伊予守

従立位下

ト

テ

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

久くたれにとて頃り吉辰の老死故人御座下にありて古き御刀と
弓ワタチと書くと後二人よ遠らぬ日本切と手紙書面にて送
とゆゆめの富人奇と銜ひて被北日にして革急にとて使ひし

アカヒヤト

アカヒヤト

アカヒヤト

アカヒヤト

。癌醫

外科の擗札ササガキ也今之觀音籤

白猫

黒蟹スズメガ也

軽策

扇也便面障面シヤン也

鎧旗

兜也雪渡酒也

榜肺

倭よつとうツヨウ

鳥麥

薑姜カクヤウ

。詩よ首如飛蓬と云ふとよりれゆと是とハ悲蓬草す

と云ふとて一このこと紀ハ野草のいつうちか一葉草ハ

ねに女とすてたがりにあよ多子ヒカルと名タネと

成膾吹山其聲春照と云ふて瓦屋もとと古氣

文通シラフハ其氣と云々此國シマガ國シマガ先山の下檣地原の丈と

よとつと古氣に也

。廿月廿日一而種矣と承る無邦の書イミツボウ古シミツあ

我國而至シテせん多氣とす者シテ多氣とす者シテ多氣とす者シテ

曰ノ日本紀椎古天皇十九年五月廿日大和國菟田野にて茅彌

に名すと云申モ也之を以テヤシテ

。立色線云謝夷運遊小觀掛猿下飯百臂相連々世に猿のひ

と云連々下迄月影と互んとする事と御くハリム
石車也延一月と云んとする。淫律異相あらずや

又行乞相連ももれりとハ列ナリ。物と云ふ事
つゆて希ト仰にアリ。

。融の大抵と云う事で世子姫と云ふのでアラハ庭中樹木

あれうるて端氣と記。又ヒミ柱の事と相氣とする事

申めりもとソ

。本草に江東無狐と云。我國にても四國のい對馬又、五島等
少は帆ウリと云海沿にアリ。アリ。少く

。大和國世尊寺のむすハ我國木像の始りす。

元亨筆書
に及る

。唐の玄宗の時長安東都兩宮八官女幾と云万人と云々古今ノ後
庭ノ盛りに云ふ事也。アリ。

土雜類

鳴呼宮中の婦人の貌

す。万どみそ文武の官人アリ。もめの事と云ふ
始より不ぬうや。玄宗此富多の極度を曉。是且惑う。
歎ナリ。アリ今僕。其家代爲り。おもてあわらう。アリ。時内

い感へて笑へて海と掌手にて一人とや秉道絶玄昭明三
先君子南嶽上真八人と十五字の号も玄宗の自称也

曾昌牧龍文

梅山下玉京金阙七宝元臺紫微上宮靈宝至真玉土辰羽白玉
天道君といふ者ハ宋の徽宗に群臣にして奉り一尊号
二十三字の中玉と宣ニまつて名じる 徽宗又上章青詞の自称に奉行玉清神霄
保仙元上陽三五璇幾九飛九大法師都天教主とけうしゆとして奉り一尊号
てれすにや数量文宗多々名古今ためにもしくやほほ
き送せ萬劫代亨に從ひよと貪乞と懼として虛誕の辯
祠狂惑此兒戯に似すにや壽福八念もう豈祈てこれとひ

やあくすく唐宋北愚主吟

○夏月和峯上人市上縞筵一律上

獨避夏畦忘去就

日幽風冷一茅亭

圃々荷露投珠潔

冉々松烟捲翠腹

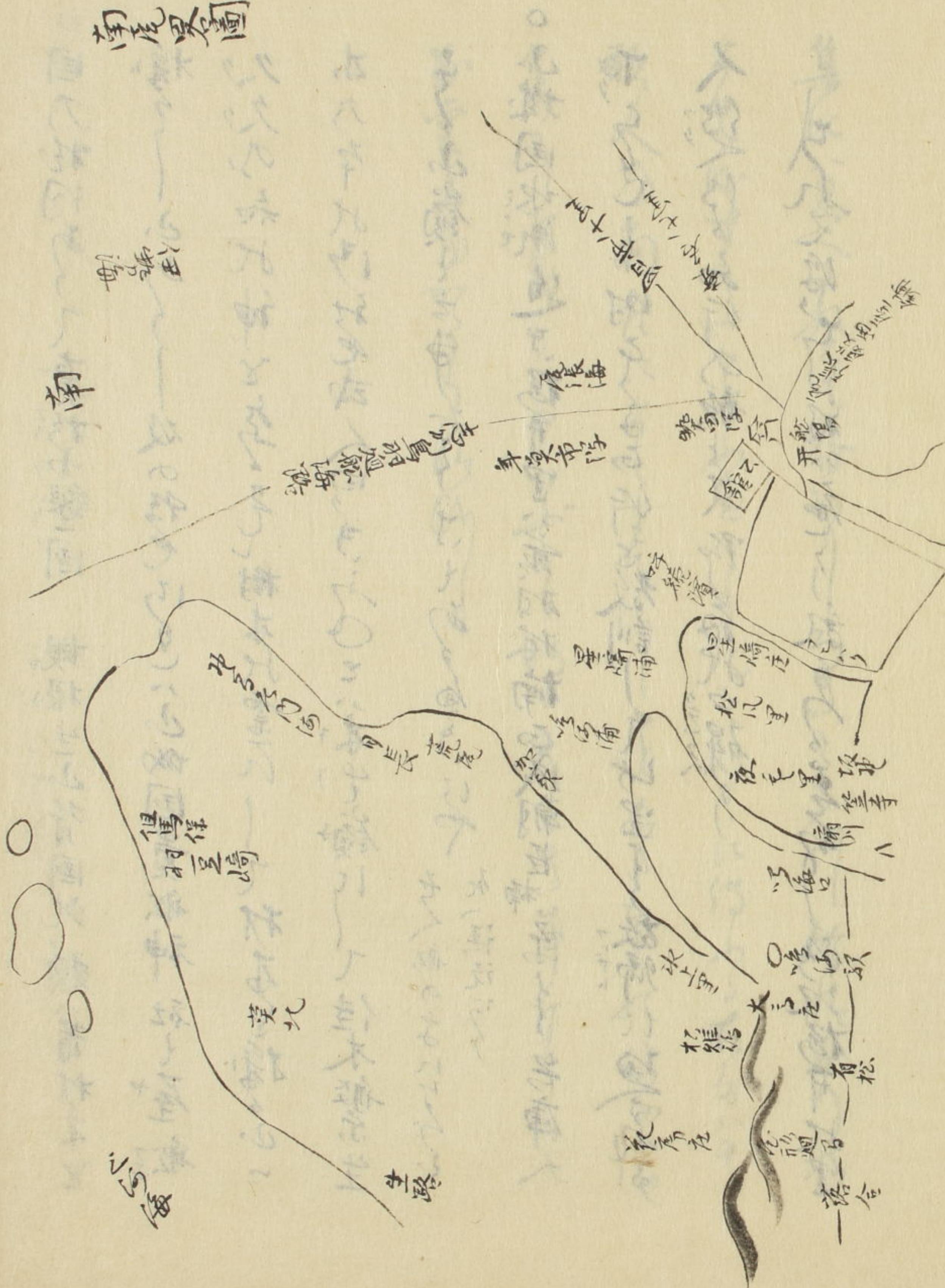
夜笛覓孤林臘鳥

破窓伴教魚飛藻

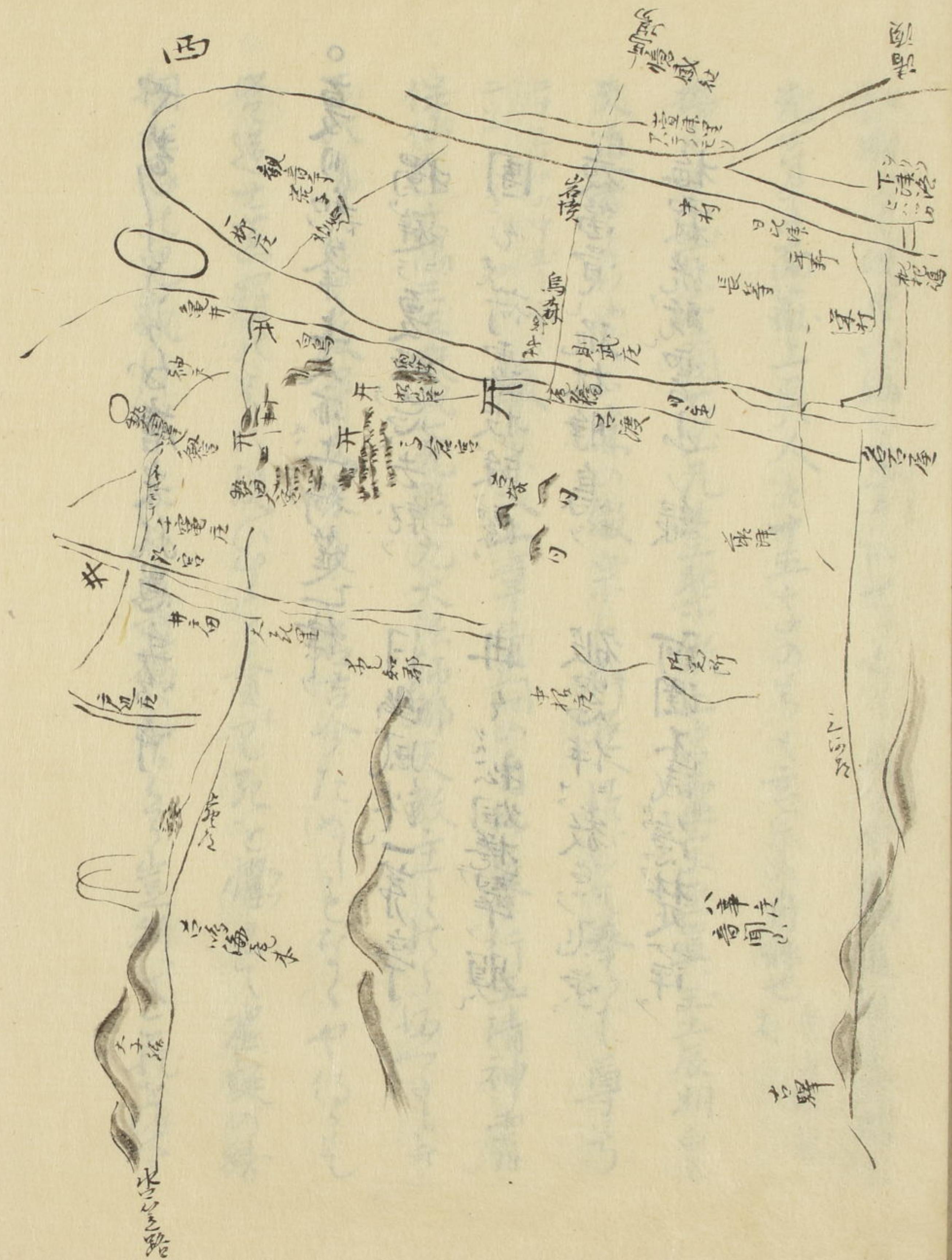
梅霖洗晚雲山綠

河潤不淺憶楚萍

南庵寒圖



西



○國乃松洞ありて真松^{スギ}が壁國

楓根生山背國此類皆材木と

樟^{シナ}ノ山^{シナ}ノ一級の移也りとハ山國貴船神社も屋^ヤ船

久々の知比神と名^ニレ樹本氏靈にて材木と樟^{シナ}山^{シナ}

木乃年代^{シテ}沙也或人曰^クミニモハ木生^{シナ}嶺^{シナ}にて佳木繁生

ミニ山嶺^{シナ}と云^フナリトモアキシナリヤ そく船の字にナリシ
久遠也

○山城國水^{シマツ}浦^{マツカ}迎^メサ移井里^{シマツ}兼羽林楠^{シマツ}西朝臣楠^{シマツ}系^{シマツ}多^シ庫^{シマツ}

下^{シマツ}シ^{シマツ}一時^{シマツ}ニ^{シマツ}行^{シマツ}と教訓^{シマツ}レ^{シマツ}里^{シマツ}故鄉^{シマツ}に因^{シマツ}而^{シマツ}

人^{シマツ}往^{シマツ}行^{シマツ}船^{シマツ}と^{シマツ}御^{シマツ}舟^{シマツ}碑^{シマツ}

史^{シマツ}之^{シマツ}は^{シマツ}也^{シマツ}船^{シマツ}ハ^{シマツ}庵^{シマツ}ニ^{シマツ}就^{シマツ}う^{シマツ}ま^{シマツ}御^{シマツ}移^{シマツ}也^{シマツ}里^{シマツ}

集^{シマツ}に^{シマツ}之^{シマツ}也^{シマツ}春^{シマツ}か^{シマツ}う^{シマツ}と^{シマツ}御^{シマツ}移^{シマツ}而^{シマツ}リ^{シマツ}乃^{シマツ}
よ^{シマツ}を^{シマツ}す^{シマツ}也^{シマツ}之^{シマツ}也^{シマツ}之^{シマツ}也^{シマツ}に^{シマツ}行^{シマツ}す^{シマツ}也^{シマツ}か^{シマツ}
歌^{シマツ}人^{シマツ}の^{シマツ}高^{シマツ}た^{シマツ}に^{シマツ}よ^{シマツ}す^{シマツ}也^{シマツ}と^{シマツ}今^{シマツ}す^{シマツ}れ^{シマツ}也^{シマツ}
集^{シマツ}に^{シマツ}之^{シマツ}也^{シマツ}よ^{シマツ}う^{シマツ}也^{シマツ}そ^{シマツ}ま^{シマツ}け^{シマツ}く^{シマツ}也^{シマツ}
お^{シマツ}堂^{シマツ}上^{シマツ}あ^{シマツ}ひ^{シマツ}く^{シマツ}也^{シマツ}

持つてゐる。彼の心も豈く、その間も、何う事か
人をかぎりに思ひ、うらやましく思ふ事もあ
る。それがけむる。自分の子と本と離れて、佳木繁生
吉田の心は、またまた、うらやましくなる。
吉田は、吉田の夫と吉田の娘の夫の二人の夫婦
夫婦の夫婦の夫婦の夫婦の夫婦の夫婦の夫
夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫
夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫

